

朝日新聞社

長谷川伸全集
第十四卷

来巾着切 明治十二年の雨

人竿忠 涙痕二代 ほか

長谷川伸全集 第十四卷

短篇Ⅱ 舶来巾着切 ほか

全十六卷・第十四回配本

一二〇〇円

昭和四十七年四月十五日発行

著者 長谷川伸

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

装幀 原弘

帯挿画 岩田専太郎

長谷川伸全集

第十四卷

目次

舶来巾着切	九
旅へ行く幽霊	二四
日本巾着切	三六
名人巾着切	五五
松平外記	七五
お化け伊多屋	七
六車の額太郎	九
屋根の声	二三
臼井十太夫	一三
射塚の喧嘩	一四

お菊の父

一六〇

玄武館の人々

一七四

鷹匠吉田平三郎

一九〇

十三歳の戦士

二〇八

明治十二年の雨

二二四

越路の手紙

二四三

名人竿忠

二五三

幕末美少年録

二八五

渡辺源次番

三〇六

ランプ虎

三二六

狐

三三三

涙痕二代

三四三

日本左衛門三代目

三五六

女囚志賀きせ

三八八

金百両如来

三八三

赤鬼青鬼

三九五

地獄の口

四〇七

満　　月

四一九

血　写　経

四三四

定九郎仲蔵

四四六

解説　村上元三

四五五

短篇Ⅱ

舶来巾着切

ほか

舶来巾着切

大きな港をもつために活々としてゐるこの市の一つの町、そこは朝から夜中まで、すばらしく雑沓する一本筋の長い町であった。掏摸のくノ一はそこを大抵は舞台に選んでいた。

くノ一という名は変だが、同類の間では少しも変とされていなかった、戸籍簿に登録されている沖伊知亮という本当の姓名の方が余ッぽどくノ一らしくないとされていた。くノ一はどこまでもくノ一らしいのが好い、けっして沖伊知亮なんて変な呼び方にしつくりはまる、そんな彼等同類の人氣者ではないのだとされていた。

そのくノ一が、賑かなことではこの市で第一番の町に立っていた。それはくノ一が好かないところの昼のことであつた。

昼のこの町の相は、くノ一にとってはけっして愉快なも

のではなかった。

くノ一は町の相を少し知り過ぎていた、昼のこの町筋を流れている気分が、いつでもどす黒いのが、ときおりどうかした機で彼奴の胸を衝いて、悲しくさえさせた。彼奴の眼の球はこの町への登場者から、明るい顔を沢山に見かけなくては安心しない習癖をもっていた。だから、くノ一が優秀な技倆を発揮する衝動は、けっして労苦の皺を刻みつけた顔を見た時ではなかった。かえってそんな時の彼奴は、味気なくなつて気が滅入つた、くノ一が沈んだ顔をして賑かなこの町から淋しい次の町へとぼとぼ行くのは、そういうした時に多かった。

が、しかし、今日のくノ一は、眼の前にいつものとおり、日に照らされて隠すことの出来ない多くの人々の顔が、生きて行くにつけての苦を、まぎまぎと見せているのに動じなかった、いつもならば彼奴は、どす黒い気分が流れている昼のこの町で、今日のように艱難に脅かされている貌ばかりを見たら——屈託のない弛んだあぶらの多い貌が出てきて、くノ一の気もちに明るさを投げ込まない限りは——生きる叫びにやかましいこの町から、次の町の淋しいところへ逃がれて行くはずだった、が、彼奴は今日に限って頑強さを以てそうしなかった。

くノ一はいつでもそうだが、今日は殊にあまり眼を動かさなかった。彼奴は常にいつていた。我々のような渡世人は、素人がいうように、掏摸は眼つきで知れる、というよ

うなものであったら、根絶やしになるはずなんだと。

眼をあまり動かさなくても、くノ一には一度に二十人三十人の顔がわかった、その二、三十の貌のなから、彼奴の指をはたらかせる衝動が読み出される、しかし、それは一日のうちに一度あったりなかったりだった、時には一時間とたたないうちに、二度も三度も、ごく稀には四、五度も、くノ一の神経を刺戟する詭向きの顔が出てくる時もあった、そんな時くノ一は一毫の容赦もしなかった、すばらしく巧みに仕事を行った。

けれども、今日のくノ一は違っていた、現にたった今も、彼奴がかねての標準と合致する顔つきの男が通った、くノ一の鑑識によると疑いもなくその男は、賭博か賭博類似か、そんな風なことで儲けた金を懐中しているのに違いなかった、誇りの強い面つきはそれを十分語っていた、慾に燃え立っているその眼は、金で縛りつける女の顔を思ひ出してゐるに違いなかった。

いい代物だ。こんな奴を素通りさせられるものか、と、いつものくノ一なら、仕事をする前の快濶さをまず味うのであった、が、今日の彼奴はむぎむぎとその適当な代物を無事に去らしてしまった。そして熱心なく、くノ一の眼は二、三十人ずつを一度にゆると眼をはたかせて、めっきり白っぽい着物の多くなったこの町から、何かしら物色し続けた。

「ちよいちよい張りなよ、どこでも張りな、当りと外れは

運賦天賦だ。さあ一銭からのお慰み」

どっこいどっこの露店の人だから、抜けて出てきた男があった。白金布の包みを軽く肩から背中へ垂らした姿は雑貨売込み商の手代と見える、だれだつて疑う余地のないその男は、鉛筆をはさんだ手帳を角帯に差し込んでいた。

「やあ今日は」

くノ一は、薄手で色の白い、女に近い美しい顔を向けて笑った。彼奴は絹セルを形よく着ていた。

「忙しそうだね」

「え、有難う。時にこの間の話の人はどうしました、まだお逢いになりませんか」

と、いかにも堅気らしく滑かに、その男はくノ一に話しかけた。

「まだ。そのうちには、ね」

くノ一はそういつて赤い唇を微かに動かしてフフといった。

「そうですか。じゃあまたいずれ」

といつて去って行く同類の背中を、くノ一は見向きもしなかった、やや真直ぐに彼奴の眼は、元の通りの熱心さで物を探していた。

こうしてくノ一が探しているのは、今の男がいった（この間の話の人）であった、それはこの頃出沒している白人拘摸をいうのであった。くノ一はその舶来拘摸の名も居処

も知らなかった、が、その仕事を一度目撃しているので顔は覚えていた。

くノ一は同類から推されて、白人掏摸に大打撃を加えるために起った、彼奴は目前の代物すら芥のごとく顧みない気概を胸一杯にもっていた。

気概！ くノ一は「日本巾着切」として猛然起ったのであった。

さいころは投げられようとしている、が、相手がまだ出てこない、舶来巾着切よ、どこにお前はもぐっているのだ。

◇

すばらしく雑沓する一本筋の長い町は、夜になるとがらりと気分が一変した、通る人々の顔から物案じを探そうとしてもそれはなかった、昼間あれほどあった生きる苦が夜は消された、どの顔に出ているものも悦びばかりだった、明るい灯の下顔という顔はみんな笑っていた、愉快に唇を開けて歯を見せていないものはほとんどなかった。春の晩が漸く過ぎた宵を、人はみんな謳歌して歩いているのだった。

こういう光景に向っている時のくノ一は、いつもきまって鉾をおさめていた、彼奴はみんなが愉快がっている夜のこの町で自分の技倆を施すことを嫌った、くノ一は昼だけ仕事をして夜は安息する時間としていた、彼奴は夜に隠れることを潔しとしなかった、白日の下を渡世の舞台として

何物をも怖れなかった。

今夜のくノ一は、しかし、いつもの彼奴ではなかった、外観からはわがろうはずはなかったが、彼奴の眼はまだ探し物に熱していた。彼奴の神経は昼間から休みなく、何万の人の顔を眺めてきた、が、彼奴の終点はやってこなかった。

悪酔いをした水夫の群が傍若無人にして通った。メリケンの奴め噪狂いでやがる、と、くノ一の冷笑が軽く唇に出てきた、それから間もなく油船の船員がどこか弱々気のある態度で六、七人通った。印度人だなくノ一は思った。

帽子をかぶらない鳶色の長い髪の毛を風に弄ばせながら、燕尾服の胸を張った山手の紳士が、沢々した胸と腕とをむき出した夫人を扶けて、雑沓の真ん中を濶歩してきた、本当にその歩み方は濶歩だった。くノ一は背丈の低い日本人のちよこまかとした歩き方と比べて、すれ違った紳士夫婦をもう一度眺めた。

やろうかしら。

ふいとくノ一は渡世の興味に勝てなくなった、夜は彼奴の指をはたらかす時でない習慣が、何の効力もなくなった。

くノ一はくるりと向きを替えた。

「おや」

と思わず口の中で彼奴はいった、くノ一が向きを変えたとたん、すると右の脇を通り抜けた白人があった、古い

背広服を着て皺だらけのスポンをはいているその男は、歩きつきで判断がついた、海で永らく生活していたものに違いなかった、古い型の黒い高帽子が頭の上に不釣合にのつていた。

幾百幾千の人が、夜のこの町を悦んで歩いている声と音とは一つにあつまり、無意味な響きになって沸き返っていた、それは人の臭さに充満した雑沓には、いかにも似合わない騒がしさだった。

そのうちでくノ一は自分を起点として、三つのものが——山手の紳士夫婦それから舶来巾着切その次は日本巾着切くノ一——一線を歩いているのを、遠くから近くへ、ついにこれへと興味深く眺めた。彼奴の眼に外のものはもう映らなかつた。

さあ！ 白か黄か、運の目を盛りつけたさいころは投げられようとしている、彼奴は興奮して来た、勝負！ と人きな声でいつてみたかつた。

「今晚は」

片脇から駈々しく声をかけた奴があつた、くノ一はじつと前方を見てからそ奴の方を漸く振向いた。

「やあ、君か」

くノ一の目は再び前方に向つた、歩みは止めなかつた。

「どうです、この間の話の人にお逢いでしたか。まだ？」

え、まだですか」

と、ひょっこり現れてきたすが金が、ついてきながら項

を前へのしてきいた。

「まださ、まだ逢やしないのさ」

くノ一は平易に答えながら眼の焦点をあらためなかつた、こうされて覚れない同類というものはあるものではない、すが金は異人夫婦とそれを狙っている？ マドロスとを直ぐ見出した。

「そうそう、この間の物、あれは譲って頂きますよ」

とすが金はだしぬけに交渉を開いた。この間の物とは勿論このマドロス風の白人掏摸を指しているのだった。

「すみませんけど一つそう願います、いずれお礼にはありますけど、じゃあさようなら」

返事も待たずに素早いすが金は、人混みを利用して紳士夫婦よりも先へ出ようとするらしかつた。

「いけないよ、あれは譲れないよ」

くノ一の交渉否定を半ば聞きながらすが金は重ねていった。

「でしようけど、あれだけは是非、とにかく明日伺います」

勝手にしやがれとくノ一は思った。お先っ走りのすが金の麦稈帽子がもう見えなかつた。

◇

くノ一の塙は、賑かなあの町から二つ目の通り煙草屋の二階の六畳だつた、ひとり者ではあり身綺麗に氣の利いた

くらし方をする彼奴、その上に美貌である彼奴は、男よりも女の数の多い町内では、何につけてもつべこべと噂の種にされた。

彼奴の美貌についてはこんな話がある。

柔和な彼奴がどうした時だか、にっこり笑ったのを見たのが博徒の親分橋場だった、親分は長い顔をふって嘆息していった。くノ一が女だったらあのあでやかに笑った顔は千両の値打があるのだが、惜しいことにや野郎で指の頭がちつといかさま過ぎる、それにしてもだれがつけたか、くノ一とはなるほどよくつけやがったなあ、と。

くノ一とは女という隠語だ。

しかし、彼奴は巾着切渡世でありながら、朝起きをしないのは勿体ないと心得、定まった用のない体で朝はきちんとして早起きを欠かさない、そんな男が、部厚く塗った白粉で不運な生地を塗りつぶし、流れ渡りをしている女に、かりそめにしろ秋波を送る気にはなれなかった、何も憎んで悪口を叩こうとまでは、この種の女に潔癖なのでなかった、むしろこうしたくぐみ臭い女には、憐憫が先に立って、もしかすると泣いてやりたい、そんな気にも時々なる男だった。

「伊知亮さん起きてますか」

煙草屋の店頭へ、あ奴にしては珍しく早い、すが金の訪れが筒抜けに聞えた。やがて二階へあがってきたすが金

は、一杯さし込んだ朝の光を、土鼠眼をして眩しそうに、光を背中にして胡坐を組んだ。

「ほう、朝茶か、くノ一式って奴だな」

「ここは人間が寝起きするところなんだ。朝は茶をのむものさ」

くノ一は沸っている湯を急須にさした。

「かまってくれるな、飲みたきや勝手に貰うよ」

「当り前だよ、俺が飲む分をついだのさ」

「ヘッあれだ、くノ一とくるとこれだからな」
すが金はちょっと苦笑した。

「ゆうべあれからどうした」

「それで今朝こんなに早くやってきたのさ、面目ねえが失敗ったよ」

「そんなことだろうと思っていた、つまらない前芸をしてくれたな」

「何といわれても一言もねえ——じつはね、あれから俺は考えたのだ、こいつあ一番、日本人の渡世が巧いか、舶来唐人の手際がいいか、ここで技倆ッこだとね」

「あり来たりだなあ」

「そう腰を折りなさんな、失敗ったには違いないが、この話は面白いのだからね」

「じゃあ聞こう、それから」

「俺の考えというのは、あの舶来野郎が狙っている物を、一と足お先にこっちが頂いてしまつて、彼奴が手を出した

時は見事にスカを踏ませようというのだ」

「つまらねえ考えだったなあ」

「そうかい。お前だったら、どうするね」

「自由にさせておくさ、それからあの舶来^{舶来}のふところを掏^掏摸^摸までだ、根こそぎな」

「それは俺も考えたよ、まず以て舶来野郎が欲しがっている物をお先へ失敬して、後手に廻らせて面を見てやる、それから今度は根こそぎあの野郎の物を捲きあげるといふ思案なんだ、こ奴が首尾よく行くと、今朝は大手を振ってはいってきたのだが、失敗ったから狐鼠狐鼠とはいってき

た」

「それで狐鼠狐鼠か」

「そうさ——で、俺は左側の仲通りを抜けて、異人夫婦を大丈夫追い抜いたと思つたから、チャブ屋横町を抜けて河岸通りへ出たんだ、まえとばで行く積りだったんだ。ところがお前、異人夫婦も舶来野郎も消えてなくなっていやるじゃねえか、驚いたね」

「相手は役者が上なんだな——ことによると俺よりは渡世が巧いのかも知れねえなあ」

「裏をかかれたなど思つたから業腹だ、何とかして探し出さなければ、お前にだつて申訳がねえと思つた」

「そうだよ、俺はみんなから推されて、舶来掏摸を退治る役を背負つてゐるのだ、お前はいわば横から出てきて、邪魔をした人なんだ」

「そうなんだ、俺もそれ考えたから遮二無二なつて探したよ、で、とうとう探し出してやつた、あ奴等は俺の裏をかいて、仲通りへ抜けて出ていやるがったのだ」

「お前の方がスカ踏まされたんだ」

「そうなんだ、俺も癩に障つたから意趣返しに何かいい工夫はねえかと思つたのだ」

「何も考えつかかつたろう」

「そうでねえ、名案を考えちゃつた、というのは、あの夫婦も例の野郎も、元居留地の警察ね、あすこの前を通るらしいのだ、そこが俺の智恵のあるところさ、で、俺は先廻りして警察の柵を乗り越して、あいつ等のくるのを待つていたのだ」

「そういえばあすこの警察は、門から玄関まで石が敷いてあつて両側は植木が茂っている」

「そうだよ、あすこは門から玄関まで二十二足あるんだ」

「お前、舶来掏摸の手口を見届けたのか」

「そ奴は見紛^{みまが}つた、随分気をつけていたのだが、とうとう残念した、だが、夫婦者の多分亭主の方のだらうね、確かに掏摸^{掏摸}かれたよ」

「どうしてお前にわかつた、お前はあ奴の手捌^{てづか}きを見なかつたといつたな」

「だつてマドロスめ、紙入^{かひ}の中味^{ぢゅうみ}をしごいて、紙入だけは警察横で下水の穴へ落しやがつたからさ、鮮かなものだった。西洋人は指先仕事はブキだというが、まんざらそうで